殺風景な日常に彩りを

乱雑に積まれた資料の山と、書籍と頂き物の酒。そんな部屋で僕は普段仕事をしている。先日の地震でもどこが崩れたのか分からないほどに散らかっている部屋で最近よく思うことがある。なんと面白みのない空間なのか、ここに絵の一枚でも欲しいなと。しかしなかなか踏み切れないでいた。なぜなら僕には美的なセンスが全くと言っていいほどないからだ。

どんな作品を選び、いくらくらい出せば良いのか全く見当もつかない。もちろんその良しあしなんか知る由もない。やはり僕のようなタイプの人間に芸術は無理なのだろうと半ば諦めもしていた。そんな中フラフラと別府駅付近を歩いていると、小さな展覧会が行われていた。個性的な絵が並んでいる。眺めていると、車椅子に乗った青年が丁寧に説明してくれた。この展覧会は「アウトサイダーアート」を集めているということ、それは障がいがある方々が作り上げたということ、作品の一つ一つは彼らが楽しく生きている証しなのだということを。そんな話と、枠にとらわれない自由な作品たちに改めて教えられた。

多様な人々の中にあるさまざまな幸せ、そして価値観や好みも、自身の中で生まれ育つものだ。そこに知識や教訓などの押し付けがましい理屈は無力なのだということを。そう思うと、自分が選んだ作品を飾った部屋を訪れた客はどう思うだろうかなどの評価ばかりにとらわれていた自分自身が急に恥ずかしくなった。気を取り直して作品を眺めながら一枚の絵を選んだ。その絵は何が描かれているかは分からないのだが、なんだか「世の中、理屈だけじゃないよ」と話しかけてくるようで、すがすがしい気分になれた。生まれて初めて絵を購入した。殺風景な部屋に飾るために。

たかみ・だいすけ　日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。41歳。

c大分合同新聞社　無断複製転載を禁じます。